
カードファイト！！ヴァンガード～闇の中で、影は何を思う～

Kavallerist

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードファイト！！ヴァンガード〜闇の中で、影は何を思う？

【Nコード】

N6569Y

【作者名】

Kavallerist

【あらすじ】

主人公はある高校生ヴァンガードファイター。

いつものように終電まで友人とファイトを楽しんだ、その帰り道。

彼のイメージは現実となってしまうた？

序章 漆黒に包まれて（前書き）

連載をこれ以上抱えるなと怒られた主でございませう。

今回はヴァンガードの小説ということで、読者の皆様はさぞイメージが得意のはず。

是非、私の拙い文を補うイメージ力をお願いします！

また注意として、これは“アニメ作品及び漫画作品の二次小説ではない”ということをご承知ください。

主人公は現実世界の男の子です。

アイチくんや櫛くんのラブロマンスなんて当然の如くございませうので、ご容赦を。

それでもOKという心の広い方は、どうぞお進み下さい。

長文失礼いたしました。

序章 漆黒に包まれて

俺は齋藤 さいとう 影猶 かげなほ。

日本の東京に住む高校一年生だ。

今は放課後、友人と共にとあるカードゲームを楽しむ真っ最中。

「ツインドライブ、チェック。…1枚目、トリガーなし。2枚目、クリティカルトリガーゲット？」

「うぎゃああああ？ 負けたぜっ」

そのゲームの名は「ヴァンガード」。

架空の大地「惑星クレイ」で、様々な種族のキャラクターを戦わせるゲームだ。詳しいことは公式サイト及びアニメを見よう。俺もそこから入ったんだ。

まあメタ発言は置いといて、たった今、友人のダメージゾーンに6枚目のカードが置かれた。それが意味するのは、我が友の敗北。

友人の名は日野和樹。俺の唯一のヴァンガード仲間。

日野はバラバラになったカードを丁寧にまとめ始めた。

「強え…強すぎるぞシャドウパラディン。なぜそんなに強いんだ」

シャドウパラディンとは、俺が使っているカードのクラン（種族）のこと。要するに、闇の騎士団。

対する日野が操るのは「ロイヤルパラディン」。シャドウパラディンとは対極に位置する光の騎士団。

名前や設定の相性は五分五分だが…俺が戦うと、シャドウパラディンは必ず勝利するのだ。

俺はとりあえず適当な返事をする。

「運だろ、運。俺のトリガー率が異常なだけ。」

「そうなのかなあ…でも、ロイヤルパラディン以外のデッキだと五分五分くらいだろ？」

そう言われてみると確かにそうで、他のファイト（対戦）だと、様々な要因でピンチになったり負けたりもする。だが、それでもロイヤルパラディンにだけは強い。

「強いて言うなら」

「おう」

「宿命とか、そういうことなんじゃねえのか？」

「なるほどなww納得だわww」

聞こえや言い方（中身も）は悪いが、シャドウパラディンはロイヤルパラディンの「負の要素」、俗に言う「はぐれもの」から完成している。切っても切れない宿命なのだろう。

だが、一勝できないと言うのも流石に悔しいらしい。日野の反応からはそう読み取れる。

「まあ、頑張つて勝てるようにしようぜってことだな」

「くそお、余裕こきやがってー！ 見てろよ？ いつか光でかき消してやる？」

「やってみろ…ろつと。俺は終電があるから帰るぜ」

「んん、もうそんな時間か？」

電車通学生の俺には、すぐ近くに駅のある我が校は本当に助かる。こんなに遅くまで遊んでいられるのもそのおかげだ。

「じゃあ俺も帰るか。じゃーな」
「おう。じゃなー」

カバンを取り、教室を出て階段を駆け下りる。
冬の夜風が頬を切り裂き、吐息を白く濁らせた。
十数台の自動車が走る車道に沿って、いつもの駅へ向かう。

「…ひゃああああ、寒い…」

もう一枚上着を着たい衝動に駆られるが、そんな暇は無い。
…と、そう思ったとき。視界の端に、青い光の線が映った。

「…？サイリウム？」

よくライブやイベントで見る、青白い蛍光色。誰かが手に持っているのかと思ったが、それは人間とは思えない低位置で、素早くうごいていた。

「…誰かが犬っころにイタズラしたのかね…よつと」

対向車線に渡り、その何かに近づく。

どうやら（暗くて見えないが）動物のようで、それは機敏に走り回る。

「待ってって？ とってやるからっ」

黒いそれは空を飛ぶかのように地を駆る。それを追うのに必死で、俺は。

「……………あ」

車道に出ていることに気がつかなかった。

かわりに、一つ気づいたことがある。

そう、あの生き物。その歩道からこちらを眺める、あいつ。犬の
ようなそれに、俺は見覚えがある。

迫るトラック、響き渡るクラクション。

頭に浮かんだ、とある一文。

『黒いハイドッグは、嵐を呼ぶ。それは漆黒の嵐だ。』

ーーーーフルバウ。俺のデッキの、ファーストヴァンガード。

さよなら、俺。

序章 漆黒に包まれて (後書き)

短い文ですみません。

また次話にてお会いしましょう。

感想等、いただけると幸いです。

第一話、奈落への道程（前書き）

連投させていただきます。ストックなんてありません。

今回はシャドウパラディンのあの方が登場します。

出番を増やして欲しいカード等ございましたら、感想にてお寄せ下さい。

第一話、奈落への道程

「ん……。」

目が覚めて、辺りを見回す。いつも通りで、なんの変哲もない自室。

「…あれ？」

何か嫌な夢を見ていたようで、それがなんなのか思い出せないのがもどかしい。

思い出せないのだから大したことでは無いだろうと台所へ向かい、朝食を取る。

「…なんだったっけ」

疑問は残ったまま、皿を片付けて時計を見る。

「やべっ！」

いつもの電車の時間に間に合うかどうかという、ギリギリのライン。

直ぐに部屋に戻り、制服に着替えてからカバンに教科書、サイフを詰めながら台所で弁当をしまい、最後にデッキケースを入れる。

近くのバス停からバスに乗って駅へ、電車に乗って駅を二つ通り過ぎ。

目的の駅で足を下ろし、徒歩三分の学校舎へ。

「ま、間に合った…」

時計は授業開始15分前を指している。思いの外時間が余ってしまった。

「よー。忙しそうだな、影猶」

「ああ、おはよう和樹…。そだ、時間あるだろ？一回ファイトしようぜ」

そう言っつて、デッキケースをチラつかせる。

だが、日野は悲しそうな顔で首を横に振った。

「それはできないんだよ、影猶。」

「どーした？…デッキでも忘れたか？」

「…だって、お前は」

『死んでるんだから——』

「っ??」

目覚めると、そこは闇。

黒い、暗い、冷たい邪気。

「夢……か……そか、思い出した。俺はトラックに轢かれて、それで死んで……。」

『そう、貴様は死んだ』

「!?!? 誰だ!?!?」

姿は見え、声だけが頭に響いてくる。

まるで雷鳴のようにくぐもった声だった。

『私を知らぬか?』

「んな初対面の相手を知るはず無いだろ。」

『ほう…。ならば、教えてやるわ…。マイヴアンガードよ』

「…マイヴアンガード?」

刹那、目の前の闇は輝いて細くなり、長くなり、広がり、姿を変えて行く。

それは、まさしく“龍”の姿。

「…まさか、お前………」

『やっと分かったか』

そう。俺は当然見覚えがある。

死ぬ前にも目にした、お前の名は…

「奈落竜、フロントム・ブラスター・ドラゴン……?」

『その通りだ、マイヴアンガード』

俺のデッキテーマでもある、シャドウパラディン。その騎士団を作った張本人であり、負の根源。

まさか、俺が死ぬときまで登場するとは…俺のイメージ力の所為だろうか。

「死んで行く俺の見送りがい？」

『違うな。』

「…じゃあ何よ。俺を喰いに来たとか？」

『それも違う。』

「えー、じゃあなんだよ」

黒い翼は少し闇を巻き上げ、槍を俺に向けた。

『シャドウパラディンに来たくは無いか？』

「…はい？どういう意味ですかな」

『我は、貴様を蘇らせることはできません。だが、死に干渉して、魂の行く先を決めることはできる』

「へえ」

『惑星クレイに飛ばしてやるう、というのだ』

正直、俺は今の状況さえ夢に思っている。

目の前にファントムブラスターがいて、急に「クレイに連れてってやる」なんて…そうそう信じられない。

「ふーん」

『…信じてないな？』

「だって…ねえ。確かにお前は今ここに居るのかもだけど…そう簡単に信じられる訳が無いじゃん」

『…面倒くさい男だな、お前は』

「えー」

…でも、まあ。どうせこれも夢なら、思いっきり試して騙されても悪く無いだろう。

せっかく来てくれた訳だし。

「…行ったとして、何かして欲しいことでもあるのか？」
『何故？』

「俺はお前がなんの利益も無いのに動くとは思わないんでね」
『…流石はマイヴァンガード』

「どうやら当たっていたようだ。
フロントムは槍を収め、翼をたたむ。

『だが、今回は「唯死に逝く主を見過ごせない」ということになって
いただけないだろうか。』

「…。したたかだね、お前は」
『褒め言葉ととっておこう』

やはり、こいつは俺のイメージ通り。
それだけに、安心して身を任せられるのかもしれない。

「じゃあそういうことにしとくか。いいよ、行こう」

『…案外あっさりしているな。本当に良いんだな？』

「しつこいよ。…なあに、偶には長考しないつてのもありだろ？」

『…もちろんだ。それでは、マイヴァンガード。』

そう言って、フロントムは槍を構える。

『ようこそ、我らが闇の騎士団へ。—————歓迎しよう』

シャドウ・イロージョンによって貫かれ、
俺はまた深い闇へと沈んで行った。

「痛たたた……」

「……おや、これはこれは」

どこかの部屋の、魔方陣の上。

「いらつしゃいませ、マイヴァンガード。歓迎させていただきます」

「……あ、ああ」

目の前で深々と頭を下げるのは、暗黒魔導士バイヴ・カー。

……どつちら、俺が見ているのは夢じゃ無いみたいだな……。

第一話、奈落への道程（後書き）

次回から長文になると思われます。

キャラの口調は全て私のイメージです。ご了承ください。

感想等お待ちしております。

第二話、智に飢えた魔物は血を求め、闇を彷徨う（前書き）

今晚は、私です。

今回からユニットが登場します。今回はバイヴ・カー様。ちらつとあのユニットも!?

全てのユニットの口調は私のイメージです。それでもよろしければ、どっぞお進み下さい?

第二話、智に飢えた魔物は血を求め、闇を彷徨う

「なあ」

「はい、なんでしょう」

長い廊下を、バイヴ・カーの後ろをついて進む。

彼は先程出会った時から笑顔を絶やしていない。逆に怖い。

「一応聞くが、お前が俺を召喚したんだな？」

「はい。奈落竜様の命によって」

「ふーん…人間の魂が召喚出来るとはね」

さっきの部屋にあった魔方陣は召喚魔法の物だったらしい。バイヴ・カーのスキルは安定のようだ。

ファントムブラスターに導かれた後、俺はカーに召喚されたという事になっている。

「私だけでなく、マーハも召喚魔法を使えますよ」

「ほー。」

話に出て来た「マーハ」というのはおそらく「漆黒の乙女マーハ」のことだろう。バイヴ・カーと同じくスペリオルコールという仲間を呼ぶスキルを持っている、シャドウパラディンの天才指揮官だ。

「…スペリオルコールスキルは召喚魔法扱いなのか…」

「？何か仰りましたか？」

「いや、なんでも無いさ」

あまりカードの効果の話をしたりすると、ヴァンガードのルール

まで教えなくてはいけなくなりそうだ。

それは面倒なので、できる限りカードの話はしないことにした。

「ところで、シャドウパラディンの拠点はユナイテッド・サンクチュアリってことだけは聞いたことがあるんだが…ここはどこだ？」

窓の無い廊下は暗く、青白い照明だけが明るさを保っていて外は覗けない。

カーはこちらに振り向いて微笑み、

「魔界城、ファタリテートですよ」

と答えた。

ファタリテートは、ヴァンガードではユニット（モンスター）として存在している。

拠点にして、兵器である…フリーバーテキストはそのままの意味だったようだ。

「ってことは、この城は今も進軍中とか？」

「いえ、今は機動を停止させています。マーハの指示もありませんから」

「ふむふむ。…もう一つ質問、いいか？」

「はい、もちろんです」

「俺らは今どこに向かってるんだ？」

その言葉で、カーはまた笑顔のまま動きを止めた。

…俺は数歩後ずさって、こっそりと周りを確認する…隠れられそうな部屋は無い。

「特にどこへも。あなた様を案内するように、とだけ奈落竜様から

は伝えられているので」

「（あのやるお？）…で、人気のないところで俺の血液をとるつもりだろ」

「おや、よく分かりましたね」

自分の使ってるユニットのこと位把握してるさ。俺は内心でそう思いながらも口には出さない。

バイヴ・カーのユニット説明はこうだ。

奈落竜の傍に仕える、黒魔術の粹を極めたカオス・ウィザード。ありとあらゆる生物の血液から魔力を採取できる。

平時は社交的な性格をしており、騎士団所属の魔女や戦士たちとも交友があるが、

それは効率よく対象から血液を奪うための演技にすぎない。彼にとっては敵も味方も全てが研究の対象でしか無いのである。

…つまり、ヴァンガード（先導者）である俺も例外では無いということ…だから…

「逃げる？」

三十六計逃げるに如かず。今まで来た道を全力で戻った。が、魔導士の前に逃走は効かず。はるか後方からきこえるカーの声が、やけに近く感じた。

「そう簡単に逃げられるとお思いですか？」

「うおおおおおおお！？」

カーが指で宙をなぞると、俺の身体は手繰り寄せられるようにカ

ーの元へ。そのまま壁に押し付けられる。

「さて、マイヴァンガードの血液…さぞ質の良い魔力が抽出できることでしょうか？」

「俺は唯の人間だから魔力なんてねえぞ!？」

「では失礼して」

「ぎゃあああああ？」

カーの持つナイフが、俺の首筋へ向かう。

その刃先がキラリと輝いた、瞬間。

「…そこで何をしている？ バイヴ・カー」

凜とした声が、無機質な廊下に響いた。現れたのは、黒衣を纏った水色の髪の少女。

少女を見て、カーはまた変わらぬ笑顔を見せる。

「やあ、マーハ。私は作業をしているだけです」

「ヴァンガードの血液を採取するだけの簡単なお仕事とか言わせねえからな!？」

「少し静かになさって下さいマイヴァンガード」

「これが静かにしてられるか?？」

俺は全力で、首に回ったカーの腕を振り払おうとする。

マーハは「ヴァンガード…?」と首を傾げ、カーに押さえつけられる俺の目の前に立つ。

「こいつが私達のヴァンガードか?」

「そのようだよ。ですよね、マイヴァンガード?」

「そうだった? そうだから離して? 頼むから?」

なんでクレイに来て早々にこんなピンチにならなきゃいけないだ、と叫びながら、マーハに助けを求める。

「…カー、離してやれ」

「嫌だと言ったら？」

「奈落竜様にこのことを伝える」

カーはビクリと身体を震わせて手を離す。

その所為で、俺は地面に尻を強打することになってしまった。

「じよ、冗談ですよ冗談。ねえ、マイヴァンガード？」

「シャレにならんわ…。」

「……………」

首元を摩っていると、マーハがじっとこちらを見ている事に気が付いた。

「な、何か？」

「……………ふんっ。」

顔を背け、そそくさと去って行く少女。

カーがため息をついて、こちらに歩み寄って来た。

「ふう、全く…彼女には冗談が通じませんねえ」

「…まるで、「お前のような人間が我々のヴァンガードとは」とでも言いたそうな表情だったな」

「むしろ「お前のようなゴミに我々が操られるとは心外だ」では？」

「ぶっ飛ばすぞお前」

「冗談はさておいて、とカーは相変わらず笑顔を崩さない。

「これからどうしますか？」

「どつって……」

正直、まだ何も考えられていない。今何をすべきなのか、なんなのか。

ファントムは「シャドウパラディンに来ないか」と言った……これはつまり、闇の騎士団に入団しろということだろう。

「カー、シャドウパラディンに入るためにはどうすればいい？」

「入る？ ヴァンガード、あなた様はすでにシャドウパラディンに入隊されておりますが」

「……………は？」

カーはまた宙をなぞる。今度は魔方陣がディスプレイのようになり、現在のシャドウパラディンの団員名が全て表示された。

カーはその一番端を指さす。

「ここです、ここ。『ヴァンガード』の欄に」

「…え？あ、え？」

まるで英語の筆記体のような文字が、確かにそこには記されていた。

だが……

「読めねえよ。」

「なるほど、クレイの言語が分かりませんか。確かに書いてあるのですが」

「…まあ、じゃあ何かしらの手続きを取らなくても良いわけ？」

「そうなりますね。あなた様はネヴァンと同じように特別待遇のようですよ」

ネヴァンか、と俺は思う。

「髑髏の魔女ネヴァン」。彼女は邪術の使い手で、その研究がロイヤルパラディンにいた時に見つかり、追われていたところをフロントムの勧誘に誘われるまま入団したという。

「なら、本格的に…何をすべきか分からないな…。どうしよう」
「…では、この城を一通り散策して見てはいかがでしょう。この地理にも慣れておくべきですし、皆に挨拶する意味も有りますよ」
「ふむ」

思いの外まともな意見で、少々驚いたが…折角だ、いう通りにしてみるか。

「じゃあそうするかな。」

「そうですね。では、私はこれで」

「何だ、行くのか。」

「はい。私も忙しいんですよ」

それでは、とだけ残して、カーはその場から消えた。 気配一つ残さず。

「…さて、行くか？」

まずは、この終わりの見えない廊下を歩き回ることにした。

「まったく…どういうことでしょうね」

カーの手には、先程、ヴァンガードである影猶に突きつけたナイフがあった。

「……………刃が九十度曲がった状態で。」

「これでは血液採取も何も無いじゃ無いですか……………」

だが、カーの口元は自然と歪み始める。

「それでこそ知りたい…あの方の血を…魔力を…？ ふふ、はははははははははは？？？？」

第二話、智に飢えた魔物は血を求め、闇を彷徨う（後書き）

感想等、できるだけいただけるとこの小説の向上につながります。

それでは、また次話でお会いしましょう。

第三話、魔女は闇に消え影を創る（前書き）

不定期にも程があるだろ自分…!!

これからもこんな感じになるかと…すみません。

第三話、魔女は闇に消え影を創る

どうやら、ひとつだけ…理解できた事がある。

ファタリテートはたしかに暗いし静かだ。闇の騎士団らしいといえればそれまでだが、それ以前に…その大きさは想像以上に異常だ。

「はあ、はあ、はあ…」

カーと別れてから、かれこれ約四十分。

一向に景色は変わらず、ただ体力を浪費するだけの時間が過ぎていた。

「くそ…何が「地理に慣れる」だ…慣れさせる気ゼロだろこの城…？」

『ぐるるお おおおおお』

「!?!」

疲労を紛らわせるため立ち止まると、唐突に廊下の遙か向こうから、何かが呻く声が聞こえた。

おぞましい声…。

「何の声だ…？ 人間じゃない…」

まあ、そもそもシャドウパラディンに人間は少ないが。

少し歩を速めると、廊下の右に扉を見つける。

「おおお、第一扉発見ってか」

勇ましく飛び込もうかとも思ったが、俺はヴァンガードと言えど新参。

二回ほどノックして、扉を静かに開ける。

「失礼しまー」

「がるるおおお??」

「おおおおおおおおおおお!!??」

部屋に入ったと思った瞬間、犬と狼の中間のような生き物に跳びつかれる。

「なななんじゃこりゃあああああ!??」

「がるるるう??」

生臭い息が鼻にかかる。さっきと同じ様に抵抗を試みた。軽く爪がこちらの身体に食い込んでいて、まったく離れない。が、

「やめなさい、ザップバウ??」

そう女性の声が聞こえると、途端に犬は大人しくなって俺から離れた。

「お怪我は有りませんか、マイヴァンガード」

「…お前は…」

眼鏡をかけ、フラスコ片手にこちらへ向かってくる女。

「秘薬の魔女、アリアンロッド…」
「覚えて頂けるとは、光栄です」

シャドウパラディンの手札交換役。…尤も俺はデッキに採用して無いが、当然全てのユニットを把握しているわけだ。

どうやら、俺が入ろうとしていたのは彼女の研究室らしい。

「邪魔したか」

「いえ、そんな事は。…ザップバウ、部屋へ戻りなさい」

アリアンロッドは最初こそ笑顔で言ったが、

「…戻りなさい？」

「?…バウ」

二度目の表情は、冷たかった。

ザップバウと呼ばれた犬が大人しく部屋に戻ると、扉は重い音を上げて閉じられた。

「…研究中だろ？ やっぱり邪魔したな」

「気にしないで下さい。それよりも、傷は有りませんか？」

「なあに、そんな物無いさ」

肩を竦めてそう言うと、アリアンロッドは俺の腕を掴み、袖を捲り上げる。

そこには、赤くなった生々しい傷があった。

「あー、えつと…これはただの擦り傷で」

「少し沁みますよ」

「何の話…ぎゃああああああ!？」

アリアンロッドは持っていたフラスコを傾け、俺の傷に液体をかける。

猛烈な熱さと痺れが一瞬で駆け抜けたが、

「……お？」

見ると、傷は綺麗に消えていた。

アリアンロッドは嬉しそうに微笑んでいる。

「痛みは有りますか？」

「…うーん…大丈夫だ、問題ない」

腕を数度ぐるぐる回して見たが、違和感は何一つない。

「凄い効き目だな…今のは？」

「実験中の治療薬です」

「俺は実験道具か!？」

全く、どいつもこいつも油断ならない。それがシャドウパラディンなのか。

「生身の人間に出会うのも久しぶりでして…失礼しました」

「ああ、うん…まあ治ったから良いんだけどさ」

ここで頭を下げられると、どうにも居辛くなってしまっ気がして慌てて頭を上げさせる。

話を変えるためにも、閉じられた扉を眺めながら俺は口を開いた。

「てことは、研究してるのはこの薬か？」

「…そうですね…少し違います。けど」

アリアンロッドは「実はあまり上手くいっていないのです」と呟いた。

「まだ成功例が出ていない状況で、目的と結論をいう事はあまり好きではないので…もう少し、時間が立つてからでも構いませんか？それならばいいお返事が出来るかと」

「む、そか。お前の方針なら仕方ないが」

ということとは、かなり研究が難航しているということ。俺にかまっつている暇などないはず。

「じゃあ邪魔者は退散するかな。これからよろしく、アリアンロッド」

「はい、マイヴァンガード。道中お気をつけて」

「おう、サンキュー」

軽く手を振って、先の見えない廊下を再び歩き出した。足取りは重い。

「…どーせ、また歩き続けるだけなんだろうなあ…ハハハ…」

乾いた笑いが廊下に響き渡り、俺はその場を後にした。

アリアンロッドは、その背が廊下の向こうに消え去るのを確認してから、閉じられた扉をくぐる。

すると、奥からまた別の女性が出てきて疑問符を浮かべていた。

「……お客様…？」

「ええ。けど大丈夫、ここには入ってこないわ」

「……よかった」

髑髏の魔女、ネヴァン。彼女はホッと胸をなでおろし、部屋の中
央の作業台へと向かい直した。

「あ、それ。中身はあげるって言ったけど、周りはちゃんと残して
いてね」

「…ええ、わかってるわ」

軽く答えて、ネヴァンは再び手を動かす。

「さて、アレが我らがヴァンガードね…。これから私たちをどう導
いてくれるのかしら」

「ヴァンガード？」

顔や手を紅に染めて、ネヴァンが声をあげた。アリアンロッドは
それを見て軽く頷く。

「ええ。さっきのお客様。」

「…そう」

「?なにかあったの？」

「…ううん、何も無いわ…はい、できた」

嬉々として頭骨を掲げ、恍惚の表情でそれを眺める。
だが、その表情もすぐに消え去り。

「…やっぱり失敗作ね、魔力は少ないわ」
「そっか、次はもう少しマシなの作らないとなあ…ネヴァン、顔汚
れてるわよ」

「…あら、ごめんなさい」

アリアンロッドから受け取った布で紅を拭い、台の上のーザーズアップ
パウだったものに視線を落とす。

「……」

「……どうしたってのよ。今日ちょっとおかしいわよ」

「なんでもないわ。本当に」

「……そ。ならいいわ、これ以上は聞かない」

アリアンロッドはそう言って、台の上のモノを適当なガラス箱に
入れ始める。

それを横目に見ながら、ネヴァンはゆっくりと扉を潜って外へ出
た。

第三話、魔女は闇に消え影を創る（後書き）

お気に入り登録が6件も……！！ありがたい限りです、これからも頑張ります！！

作者は応援に弱いのです。次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569y/>

カードファイト！！ヴァンガード～闇の中で、影は何を思う～

2011年12月3日00時46分発行